



平成 23 年 1 月 8 日

私たちチーム第一期メンバーはまず、南魚沼の光を観よう!ということで歴史を訪ねる研修を行った。

雪国のお寺とは、こんなにも寒いのかと、ふだん暖房に慣れている私たちはなぜかそこだけ強烈に覚えている(笑)

どこのお寺も国宝級の宝物があり交通網が発達していない時代  
便の悪い雪国の田舎になぜこれほどまでも歴史的価値がある遺産が多いのかと、驚き感動したものです。

その中でも、私が一番びっくりしたのが龍谷寺(南魚沼市大崎)というお寺様。  
今となっては石川雲蝶の彫刻が見られるお寺として一躍有名になったが、  
深い歴史があり素晴らしいお寺だ。

境内に到着すると、インド Gupta 王朝様式の建物がいきなり登場する。異国ムード満々だ。

さっそく本堂で、ご住職様から、たくさんの事を教えて頂いた。

まず御本尊の阿弥陀如来像が大変貴重な歴史遺産だという事。

今から約千年も昔。

「前九年の役」の戦にて源頼義公が大勢の兵を率いこの地を訪れた。

ところが

戦に向かう軍勢は大崎村で猛吹雪に遭い遭難し千人もの凍死者を出したという記録が残っている。

これは雪害の記録として日本最古のできごと。

兵士の魂を弔うため、将軍である源頼義公が阿弥陀如来をこの寺に寄進されたものだそうだ。

その頃の寺は現在の地にはなく  
遭難の場所を一望できる高台にあり、龍の口六萬寺という名前で  
霊峰八海山を修行の道場として創建された天台宗の寺だった。

山の中の天台宗の寺院といえば  
松尾芭蕉が『おくのほそ道』に記した  
「閑さや 巖にしみ入る 蝉の声」の句で有名な  
山形県の立石寺、通称「山寺」が有名であるが  
当時の龍谷寺は山寺のような寺だったのだろうか  
深山幽谷の修行道場のイメージと景色が頭に浮かんだ。

当時の仏教は、神道、陰陽道、神仙道などの習合を深め、寺院を山の奥地に建立し、  
山岳宗教の色彩を強めていたのだ。

大永三年(1523年)、天慶宗積禅師が上州より来越。  
禅宗寺院として復興し、この時、「龍の口龍谷寺」と名を改め以後曹洞宗の寺院となる。

その後しばらくして山中にあった寺が雪崩で倒壊。  
現在地へ移った。

現在地は南北朝時代の豪族「大崎九郎右衛門」の居館跡地で  
この引越しを機に「八海山龍谷寺」という名称が使われるようになった。

江戸時代中期に現在の本堂を建立。  
山門、坐禅堂、衆寮等が整備された。  
坐禅堂があったという事は修行僧もいたのだろう・・・。  
石川雲蝶が本堂の欄間などの彫刻を施したのはこの時代よりも後だろう。

大正期以降ご住職様は海外布教活動を行ってきたという。  
終戦後、ハワイの日系移民の間で  
世界平和と祖国日本の復興を祈願した信者さん達の間で  
観音様の建立が発願され十一面観世音菩薩像が完成した。

この観音様を安置する観音堂の建設に際し  
仏教発祥の地であるインド、その建築に憧れたご住職様が  
築地本願寺の設計を担当された伊東忠太氏の愛弟子で

インド建築に精通していた大岡實氏に設計の依頼をしたのだそうだ。  
大岡實氏は、建築史家であり文化財研究の第一人者として  
大きな業績を残しておられる方。

昭和 40 年に観音堂「慈雲閣」が落慶。  
引き続き昭和 54 年に「妙光堂」落慶。

この独特な雰囲気をもつ寺院には  
人々の慈愛と平和を願う強い力と想いが相重なり  
千年の時を経て、この場所に阿弥陀如来に導かれたかのように様々な仏様が習合し形成されたのだ。  
ヒストリーも面白い。  
さて、立派な本堂でやはり目を引くのは石川雲蝶の彫刻。

雲蝶は葛飾北斎の筆致をモチーフに取り入れているのが特徴とされているが  
ここの欄間の「波」はまさに!! 北斎!!  
一刀彫だけで波の動きや遠近感、立体感を表している。  
圧巻だ。

百獣の王「獅子」と百花の王である「牡丹」。  
母に駆け寄る幼い唐獅子。  
母子の微笑ましい一瞬を彫り上げた一間の欄間。  
一枚の木に母子愛を表現しきった。

奥の部屋には雲蝶の一味違った彫刻がある。  
欄間の彫刻は表と裏に別の図柄が描かれていて表には葡萄と朝顔。  
裏へ回ると小さな蝶が彫られていた。

インドグプタ様式の観音堂から始まり、石川雲蝶の欄間も見事な本堂。  
そしてコンクリート打ちっ放しな現代建築の妙光堂。  
妙光堂に安置されている百二十尊の仏像。

苦しい世の中をどう生きるかということ千年以上も説いてきた仏教の教え。  
「人々をどうしたら幸せにできるか」  
という教えを示してくれているお寺です。

心静かに深いひとときをお過ごしください。

住所 南魚沼市大崎 3455